

令和元年5月13日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K04244

研究課題名(和文)15世紀イタリアにおけるギリシャ語教育の導入に関する教育思想史研究

研究課題名(英文)The introduction of Greek learning in the 15th century Italy

研究代表者

加藤 守通(Kato, Morimichi)

上智大学・総合人間科学部・教授

研究者番号：40214407

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：西ヨーロッパにおいてギリシャ語が再び教えられるようになったのは、1397年、フィレンツェ大学でのことであった。この時に招聘されたのがビザンティンの碩学クリソロラス、彼を招聘したのがフィレンツェの書記官長サルターティであった。本研究は、両者に焦点を当てて、この歴史的な出来事の背景を探った。結果として、ビザンティンとの交流は以前からヴェネチアを中心としてあったにも関わらず、ギリシャ語教育がヴェネチアではなくフィレンツェで最初に導入された背景に人文主義的情熱があることが明らかになった。また、クリソロラスの著作『エロテマタ』が教科書ではなく、ギリシャ人教師の手引き書であるという知見も得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来、教育史研究において単発的な出来事と見なされてきた、サルターティによるクリソロラスのイタリアへの招聘の背景を様々な面から明らかにしたことは、明治期における「お雇い外国人教師」の招聘と比較した時、我々にとっても身近な問題になりうる。それは、文明間の対話に関する具体的で歴史的な事例を提供する。そこには、単なる地理的近接や戦争などの社会的要因だけでは説明できない、文化的憧憬がある。単なる実用主義の視点からは理解できない、語学教育の人間形成的意義がそこから読み取れるであろう。

研究成果の概要(英文)：It was in 1397 that Greek language was taught for the first time in Florence. This was occasioned by the invitation of a Byzantine scholar, Manuel Crisoloras by Coluccio Salutati. Focussing on the historical meaning of this event, the research tried to elucidate its background. It became clear that even though the commerce with Byzantine Empire was frequent, in which Venice played a special role, the invitation of a Byzantine scholar had to be postponed until the Italian humanism became sufficiently ripe to receive Greek language. It also became clear that the Erotemata, which was commonly regarded as a text book of Greek language, was probably a manual of teaching for the native Greek teacher who taught in Italy.

研究分野：教育哲学、教育思想史

キーワード：ギリシャ語教育 フィレンツェ サルターティ クリソロラス ビザンティン 14世紀 グアリーノ・ダ・ヴェローナ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

#### 1. 研究開始当初の背景

(1) 15世紀イタリアにおいてギリシャ語教育が導入されたことは共通の認識であったが、その具体的経緯については不明な部分が多かった。

(2) クリソロラスがギリシャ語をイタリアで最初に教えたと言う点は共通の認識であったが、彼の教授の実態については、いわゆるギリシャ語の「教科書」である『Erotemata』についての研究が進んでいないこともあり、解明の必要があった。

#### 2. 研究の目的

本研究の目的は、15世紀イタリアにおけるギリシャ語教育の導入に焦点を当て、その歴史的・思想的背景を明らかにすることにある。従来の人文主義研究の関心は、主として、ラテン語の学校教育への導入に向けられていた。それに対して、ギリシャ語の研究と教育に関しては大雑把な指摘がほとんどで、詳細な研究はいまだ十分になされてきたとは言いがたい。ギリシャ語教育のイタリアへの導入の過程を解明することは、西ヨーロッパとビザンチンという二大文明の知的交流の実態を明らかにするだろう。同時にそれは、近代西洋が古代ギリシャを再発見し、それを自らに同化していく過程を読み解くことに寄与するだろう。本研究は、ギリシャ語教育の導入過程を歴史的に追いながら、それらの背景にあった歴史的状況とイデオロギーを明らかにする。同時に、ギリシャ語教育がどのように行われたのかについても史料を調査して解明する。

#### 3. 研究の方法

(1) ギリシャ語教育の導入過程の研究は、必然的に受け入れ側の思想と事情、そして受け入れられた側の思惑と事情に関する研究に分かれる。まず、フィレンツェ大学におけるギリシャ語講座の開設に尽力した同市の書記官長サルターティヤやコンスタンティノポリスでギリシャ語を学習したグアリーノ・ダ・ヴェローナ等の言説の分析を通じてギリシャ語熱がどのようにしてイタリアに生まれたかを明らかにする。(2) クリソロラスのギリシャ語「教科書」「Erotemata」を研究し、ギリシャ語教育の実態を改定する。(3) イタリア側とビザンチン側の交渉に着目し、両者の背景にある諸事情を明らかにする。

#### 4. 研究成果

(1) 2015年度。まず、Weiss, R. (1977). *Medieval and Humanist Greek*, pp. 227-254を基礎的な資料と定め、以下の点を確認した。1) 前クリソロラス期。クリソロラス以前にもフィレンツェにはギリシャ語教育の機会があった。1369年にシチリアからギリシャ語を知るピラト(Leonzio Pilato)が来訪した時である。しかし、彼の来訪はポッカッチョ以外のヒューマニストにはまったく影響を与えていない。ポッカッチョも、ギリシャ語に関心は持つが、上達はしなかった。2) サルターティヤ(Coluccio Salutati)の影響。フィレンツェにおけるギリシャ語への関心は、サルターティヤによるところが多である。3) アンジェリ(Iacopo Angeli)の活動。サルターティヤは、アンジェリを1395年にコンスタンティノポリスへ派遣する。その目的は、1) ギリシャ語原典の取得 2) ギリシャ語の学習 3) 当時名声を博していた知識人クリソロラスのフィレンツェへの招聘であった。4) フィレンツェ招聘の実現。この件に関しては、クリソロラスによるしたたかな金銭交渉があった。以上の点の中で、教育思想史の観点からとりわけ注目に値するのは、サルターティヤの思想である。ギリシャ語(それも古典ギリシャ語)を学ぶためには、古典ラテン文学の研究の深まりによって得られた精神の成熟が必要であったのである。さらに、アンジェリという比較的知られていないヒューマニストの重要性も明るみに出た。

(2) 2016年度。15世紀イタリアにおけるギリシャ語教育の導入過程において最重要な事件は、フィレンツェの書記官長であったコルッチョ・サルターティによるピザンチンの碩学クリソロラスのフィレンツェへの招聘(1397年)であったことは論を待たない。その背景については、まだ十分に明らかになっていないが、1390-91に、サルターティの弟子である Roberto di Francesco di Dolcino RossiがヴェネツィアでクリソロラスとDemetrio Cidoneに知り合い、クリソロラスから短期間だがギリシャ語を学ぶことができたということはわかった。このことによって、浮かび上がって来たのが、当時の西洋文化においてピザンチンとの橋渡しをしていたヴェネツィアという国家の重要性である。しかし、教育思想史の分野では、エウジェニオ・ガレンの大著『ルネサンスの教育』などに代表されるように、ヒューマニズム教育はフィレンツェに焦点を当てて、論じられてきた。したがって、ギリシャ語教育の導入に関しても、フィレンツェ中心の解釈が一般的であった。今回、ヴェネツィアに赴き、その歴史に関する研究を進めることによって、この解釈の一面性に気づくことができた。サルターティの弟子であったレオナルド・ブルーニはクリソロラスからギリシャ語を学んだのちに、「西洋で700年間忘れられていたギリシャ語を最初に習った」と豪語したが、当時のヴェネツィアにおけるピザンチンとの交流に鑑みた時、ブルーニの言葉(そしてそれに依拠したルネサンス思想史)から一定の距離を置く必要が認識された。

(3) 2017年度。古典ギリシャ語が西洋の中等教育カリキュラムに15世紀に導入されたという歴史的イベントの思想的背景と状況を調査した。従来、このイベントについては、フィレンツェの碩学サルターティとピザンチンの学者クリソロラスの関係に焦点が与えられてきた。しかし、ピザンチンとの関係において海洋大国ヴェネツィアが演じた役割は大きい。さらに視野を広げて見れば、シチリアと南イタリアは、ピザンチンによって再征服され、中世を通じても一定のギリシャ語文化が残っていたこともわかった。ギリシャ語文化圏は、イタリア半島においてさえ、一定の程度で残存していたのである。それにもかかわらず、中央・北部イタリアにおいては、ギリシャ語教育は中世において皆無に等しかった。14世紀を代表する文人たち、ペトラルカとボッカッチョもギリシャ語学習を志したが、成果を上げていない。それが、クリソロラスという教師を得た後、ギリシャ語教育は堰を切ったように14世紀末から15世紀前半にかけてイタリアからヨーロッパ全体へと拡散していったのである。本研究では、サルターティ、ブルーニ、グアリーノ、ヴェルジェリオといった人文主義者たちの言説を解釈・翻訳する中で、ギリシャ語教育の拡散の背景にある、ギリシャの芸術・思想への憧れの高まりを調査した。また、それと呼応するかのよう、トルコ人によるコンスタンティノポリスの占領とピザンチン帝国の滅亡によるピザンチンの教養人たちのヨーロッパへのエクソドスにも注意してきた。具体的な成果としては、ヴェルジェリオの教育論「自由な青少年にふさわしい性格と学問について」を翻訳した。この翻訳は、バッティスタ・グアリーノの「教授と学習の順序について」の拙訳などとともに、東京大学出版会の「イタリア・ルネサンス叢書」の一冊として刊行される予定である。

(4) 2018年度。2018年4月から9月までドイツのミュンヘン大学哲学部に客員教員として在籍し、バイエルン州立図書館にて文献調査を実施した。とりわけヴェネツィアとバーゼルで刊行された、クリソロラスのギリシャ語教科書『Erotemata』の諸版(1512年、1542年、1543年)を手に取り、内容を細かに確認できたことは、有益であった。これらの版に共通の特徴は、ギリシャ語動詞の活用や形容詞の格変化について、解説はあるが、表がない、ということである。このことは、もしもこれらの著作を教科書として用いた場合、学習者にとって大きな負担となり得

る。もっとも一つの版(1512年、Aldus版)では、不規則動詞に関してはアルファベット順に活用  
が列記されてはいる。他方、すべての版は、教師が生徒に問いを提示し、生徒がそれに答える  
という形式を取る。問いを意味する *Erotemata* というタイトルはここから発するのだろう。これら  
のことを総合的に考えると、本書は、従来考えられているようにギリシャ語の教科書ではなく、  
教師がギリシャ語教育に用いるマニュアルではなかったかと思われる。なお、1546年のパーゼル  
版では、テキストはギリシャ語のみであるが、それ以外に参照したヴェネツィア版では、ギリ  
シャ語とラテン語が見開きで対応するように列挙されている。これも、生徒のためというよりも、  
ラテン語に不慣れなギリシャ人 教師のためのものと考えられることもできよう。このように、  
『*Erotemata*』について、新たな視点が得られたことは貴重な成果である。なお、ミュンヘン滞  
在中には、ベルギー、イギリス、ローマ、パリ、ドレスデン、ウィーン、イスタンブールの図  
書館を視察し、ルネサンスとビザンチンの言語教育に関する見識を深めることができた。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計3件)

1. Kato, Morimichi, Humanistic Traditions: East and West: Convergence and Divergence, *Educational Philosophy and Theory* 査読有, 48-1, 2016, pp. 23-35
2. 加藤守通, 「教養論の二つの系譜 - パイディアとレトリック・ヒューマニズム」, 『哲学』査読有、第66巻、2015年、65-82頁。
3. 加藤守通, 「教養とは何か - 思想史から考える -」, 京都大学大学院教育学研究科・教育実践・コラボレーションセンター『E. Forum教育研究セミナー成果報告書』査読有、2015年3月、7-28頁

### 〔学会発表〕(計3件)

1. Kato, Morimichi, Calendar Arts and Ritual of Feeling: Philosophy of Education Society of Australasia 48th Conference, Rotorua, New Zealand, 9 December, 2018
2. 加藤守通, 「ジョルダナーノ・ブルーノの自然観」, 慶應義塾大学言語文化研究所公募研究公開プログラム「東と西の自然観 - ヨーロッパ、イスラーム、中国 -」, 2016年12月3日、慶應義塾大学三田キャンパス東館ホール。
3. 加藤守通, 「世俗化の行方 - 宗教的視座から見た文明史の一考察 -」, 2016年9月11日、教育思想史学会第26回大会、武庫川女子大学中央キャンパス学校教育館

### 〔図書〕(計2件)

1. Kwak, D. -J., Kato, Morimichi, Hung, Ruyu. *The Confucian Concept of Learning: Revisited for East Asian Humanistic Pedagogies*, Routledge, May 9, 2018, 122 pages.
2. 加藤守通, 翻訳 ヨハン・ヴァレンティン・アンドレーエ著「クリスティアノポリス」, 池上俊一(監修)『原典 ルネサンス自然学』(下) 名古屋大学出版会、705-796頁、2017年。

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。